

氏名(本籍)	趙 ^{ちよう} 鍾 ^{しよう} 仁 ^{じん} (韓国)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第179号
学位授与年月日	昭和59年3月22日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	バートランド・ラッセルの教育思想の研究 —彼の教育論に見られる教育思想の本質とその教育史的意義—
主査	筑波大学教授 教育学博士 松島 鈞
副査	筑波大学教授 長谷川 栄
副査	筑波大学教授 佐藤 三郎
副査	筑波大学教授 教育学博士 相川 高雄
副査	筑波大学教授 石部 元雄
副査	筑波大学教授 教育学博士 成田 十次郎
副査	筑波大学助教授 白石 晃一

論 文 の 要 旨

本論文は以下の序章と本論4章および終章から構成されている。序章(1.研究意図と研究課題 2.先行研究の概要と問題点 3.研究方法と内容の構成)第1章 20世紀初頭のイギリスの時代状況とラッセルの時代批判(1.社会経済状況と資本主義 2.教育と「新宗教」 3.近代ナショナリズムと教育 4.教育状況とラッセルの対応)第2章 ラッセルの教育目的論(1.教育目的論の展開 2.人間生活の原動力としての本源的衝動 3.具体的教育目標としての知性の形成 4.個性と社会性の調和)第3章 ラッセルの教育方法論(1.教育方法の原則 2.発達段階に応じた教育方法 3.ピーコン・ヒル学校の教育 4.世界平和と世界市民の育成)第4章 ラッセルの教育思想の教育史的意義(1.ルソーの教育思想の継承, 発展と克服 2.近代教育及び近代教育思想の難点の克服 3.現代的な道徳的人間観の提示 4.平和の為の世界市民の育成とその教育の提示)終章 総括と今後の研究課題。本文は746頁(400字詰), ラッセルの著作目録・参考文献は14頁より成る。

序章では, まず個人の育成と市民の形成との調和を探究したラッセルの教育目的論を解明し, さらに教育の内容・方法論の分析を通してラッセルの教育論を統一的・構造的に理解し, その本質と教育史的意義を究明したいとする本論文の研究意図が提示されている。そのために, ラッセルの教

育関係著作を中心にして広く彼の教育論を分析検討するとともに、彼が創設し経営・指導にあたったビーコン・ヒル学校の教育実践を併せみることによって、上記の研究意図の達成を図るとする研究方法論が述べられている。

第1章では、20世紀初頭の時代状況を明らかにして、ラッセルが時代をどのように捉え、何に挑戦し、教育をいかに把握しようとしたかを問題にしている。その際、政治・経済・宗教・思想などの教育外的要因と、新教育論や帝国主義的教育思想などの教育的要因に分け、それぞれに対応するラッセルの所説を整理叙述している。そしてラッセルが、政治の具に墮している教育の実情を反省し、そのような教育を支持する当時の教育思想を厳しく批判して、固有の教育論を主張した事情を明らかにしている。

第2章では、ラッセルの教育目的論の展開に即して、彼の教育目的論の分析と究明を行っている。即ち、ラッセルは従来の教育目的論を再検討し、この作業をふまえて独自の教育目的論を提示したとし、まず生命力と勇気と感受性を具有した個人の形成が追求され、次いでかかる個人を知性の練磨を媒介にして現実的かつ漸進的に市民に育成することが究極の教育目的とされている、と述べている。そして、このような個人と市民、換言すれば個性と社会性の調和は、人類社会という全一団における世界政府の実現をまっとうして、はじめて有効に行われるとするラッセルの思想を明らかにしている。

第3章では、前章で扱った教育目的を達成するための教育の内容と方法、即ち広い意味での教育方法に関するラッセルの所論の解明が行われている。即ち、科学性、愛、性格と知性の形成の三者を教育方法の基本原則とし、これを子どもの成長段階に即して適用して、望ましい習慣の形成、道徳性の育成、知性の伸長を行うべきであるとするラッセルの主張が詳述されている。そして、この教育方法論を実際に応用したものがビーコン・ヒル学校の教育実践であったと述べている。

第4章では、ラッセルの教育思想を歴史的に位置づけ、その教育史的意義の究明を行って、次の4点を指摘している。第1は、ルソーの教育思想の継承・発展・克服である。自由な個人の形成を教育の直接の目的としたことはルソー思想の継承であり、ビーコン・ヒル学校の経営はその発展であり、市民の育成を人類社会を基盤とする世界政府に求めた点はルソー思想の克服であると述べている。その2は、近代的教育および教育思想の難点の超克である。人間存在の根本に踏み込んで、人間の真の解放を目指したラッセルの教育思想および実践は、既存の社会・国家体制への単なる適応の理論と技術を提供する傾向を持つ近代教育に対する超克の努力として注目される、としている。第3は、現代的な道徳的人間観の提示である。即ち、ラッセルが国民教育の巨大化と科学技術の進歩による破滅の恐怖と危険から人類を救出する意図のもとに、普遍的な人間愛を基盤にした新しい希望の道徳を提示した点を高く評価している。最後は、平和のための世界市民の育成の提唱である。ラッセルは現代社会の担い手たるべき新しい道徳を修めた市民の育成と、さらに戦争をなくして恒久平和を樹立するための世界市民の形成を提唱してその教育を構想しているが、論者はこの点に大きな歴史的意義を認めている。

終章では、これまでの所論を総括し、併せてラッセルの全思想体系の把握とそこにおける教育の

位置づけなど、今後研究すべき課題が述べられている。

審 査 の 要 旨

バートランド・ラッセルは固有の教育思想家というよりは、数学者・論理学者・哲学者として一般に知られている人物である。それだけに、ラッセルの教育論に関する先行研究は数も少なく、またそれらの諸研究も断片的、部分的に問題を取りあげているに過ぎず、ラッセルの教育論に本格的に取り組んだ研究はみられない。本研究は、このような研究状況のなかで、ラッセルの教育論の重要性に着目し、彼の教育論の全体を対象にしてなされた、まさに本格的なラッセル教育論研究である。この点に、まず大きな意義を認めることができる。

とくに本研究は、乏しいながらも存在する先行研究の問題点を明確にしてその克服をはかり、さらに進んで資料の十分な分析と適切な検討によってラッセル教育論の本質を統一的・構造的に把握理解しようとし、この困難な研究課題に対して批判に耐える明確な解答を用意することに成功している。このことは、さらにこの究明作業の成果をふまえて行われたラッセルの教育思想の歴史的意義についての鋭い考察とともに、極めて高い評価に値するものである。

本研究には、世界政府の構想と教育の目的・方法論との具体的な関係の究明など未解決の問題点も指摘できるが、全体として本研究は教育思想史研究に価値ある頁を書き加えるものであり、これによって広く教育学界の発展に多大の寄与をするものであると考えられる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。